

## マダコ種苗生産に取り組み、稚ダコ 1,000 個体を生産できました

マダコは刺身、酢の物、天ぷらやタコ飯など多くのレシピがあり、なじみ深い食材です。香川県は、消費を示す家計調査でも全国 2 位（2018～2020 年の平均）のタコ好き県で、マダコは県内の漁獲量も多い主要魚種です。

しかし、近年は全国的に漁獲量が激減しており、資源の維持増大が求められています。

本県の漁業者団体は古くから、親となる大きなタコを他県から購入し放流するなどしていますが、回復にはいたっていません。また、マダコの種苗生産技術は、国内では 60 年以上に渡って取り組まれてきましたが、稚ダコを安定的に飼育することはできませんでした。

そのような中、国の研究機関である水産研究・教育機構が、適正な水流を発生する飼育装置とガザミ幼生の給餌などを組合せ、2017 年に、3 水槽で約 3,000 個体という高生残率（平均 77%）で稚ダコ生産することに成功しました。

この成果をもとに、水産研究・教育機構、大学、企業および関係県が共同で種苗生産と養殖技術の開発に取り組むことになり、本県も 2018 年から種苗生産の餌の確保技術の開発、2021 年からは稚ダコの生産技術の実証を行っています。

2022 年 4 月中旬から親ダコ飼育を開始したところ、4 月下旬～5 月上旬には産卵が見られ、6 月上旬からふ化が始まりました。そこで、ガザミ幼生の給餌を開始できるタイミングを図って、2 水槽にそれぞれ 800 個体（合計 1,600 個体）のふ化ダコを収容し、種苗生産の実証試験を開始しました。生産期間中、ガザミ幼生を切らすことなく給餌できたこと、飼育環境をよい状態で保てたことなどから、日に日に成長が見られました。6 月下旬に稚ダコが壁面に付着したタイミングで取上げたところ、合計 1,089 個体（平均生残率 68.1%）を生産できました。

また、ふ化ダコを効率的に得るための親ダコの飼育・産卵とふ化技術の開発も行うとともに、ふ化ダコの地先放流も行っています。

今後も、安定的な種苗生産ができるよう技術開発を行っていく予定です。

この研究は、国立研究開発法人生物系特定産業技術研究支援センター「イノベーション創出強化研究推進事業」の支援を受けて行ったものです。



右：飼育水槽  
左：取り上げた稚ダコ  
（1マスが1cmを示す）

（文責 原 佐登子）